

## 「夏は」はだめで、「私は」はいい

馬場良二（日本語教育学）

夏は四川省の成都すごく熱いから、大学学校の大きな池は子供たち一番人気な場所です。

この文は熊本に來ている留學生の書いた作文から抜いてきたものです。どうですか？

漢字、つまり表記の面から考えると、「熱い」はまずいですね。言語としての日本語は、お湯がアツイのも、気候がアツイのも区別しません。温度が高いと感じることを「あつい」と言います。が、漢字が伝わってきた頃、中国語では区別していて、お湯が「ネツ」とか、きょうの天気が「ショ」とか言っていた時代があったのでしょうか。とにかく、漢字で書き表す場合には別々の文字をあてなくてははいけません。

次は、「大学学校」です。これは、表記の問題というよりは、語句の問題です。日本語に「大学学校」という語はありません。文に「四川省」とあることから分かるように、この作文を書いた留學生は中国人です。中国語には「大学学校」という語があるのかもしれませんが。あるいは、なじみの深い「大学」という語に「学校」をつづけて、新しい語を作ってしまったのか、あるいは、単なる書き誤りか。

「人気な場所」も普通は言いません。「人気」に「場所」を形容させるため、形容動詞の活用語尾である「な」をつけました。気持ちは分かりますが、「人気な場所」というとなんだか週刊誌のつるし広告のようです。「人気のある場所」の方がわかりやすいでしょう。

中国語には日本語の「てにをは」にあたるものはありません。だからでしょう、よく落とします。「成都」と「子供たち」のあとには何かしら助詞が必要です。「子供たち」の方は簡単で、「に」です。「～が～に人気があ

る」で一つの言い方となっています。では、「成都」のあとは何がいいでしょう。

私は、大学で留学生のための日本語のクラスを持っています。作文は、そのクラスで書いてもらいました。書いてもらったものを集め、注意深く添削し、その中の間違った文を集めてプリントを作ります。そのプリントを授業で配り、学生にあてて板書させ、ホワイトボード上で添削してもらいます。教室の学生全員の見ている前でなおしてもらうのです。あてられた学生もすわって見ている学生も添削できないときは、私が助けます。

夏は四川省の成都はすごく暑いから、大学学校の大きな池は子供たち一番  
人気な場所です。暑  
に  
のある

ここまでは添削できても、「成都」の次がうまく説明できません。「は」でもいいとは思いますが、落ち着きません。この文では、「～は」を二つ並べてはいけないのです。似たような文でも、「夏は四川省の成都はすごく暑いのですが、同じ四川省でも峨眉山麓なら過ごしやすいです。」では、「～は」が二つ並んでいても不自然ではありません。これは、文全体が「夏」について語られた文で、「夏は」の「は」は、文の主題を示す「は」、次の「成都は」の「は」は対比、「峨眉山麓」との対比を示していて、二つの「は」の文中での役割、機能が違うので問題とならないのです。一方、「夏は四川省の成都はすごく暑いから、大学の大きな池は子供たちに一番人気のある場所です」だと、「成都」と対比されるものが文中になく、「成都は」の「は」の意味用法が特定できなくなってしまいます。それで、何だか耳にすっきりしない文となってしまうのです。

「は」以外の助詞でも同じことが言えます。「ラジオで英語を勉強する」、「会話番組で英語を勉強する」。どちらの「で」も「何かを使って、道具として」の意味を持つ格助詞です。同じ意味用法の「で」を使った文、「ラジオで会話番組で英語を勉強する」は、文法的に正しくありません。同じ

「で」でも、場所を示す「で」と道具を示す「で」なら、「自分の部屋でラジオで英語を勉強する」、すっきりはしなくとも文法的な問題はありません。

授業の時には、この文では「は」を二つ並べることはできない、と言いました。そして、語順を変え、「四川省、成都の夏は」としました。NHKの紀行番組のナレーションのようで、ちょっと大げさな言い回しになるかもしれませんが、日本語としてはどっしりと落ち着くのではないのでしょうか。ただ、名詞の後には「てにをは」を入れなくてはいけない、と口をすっぱくして言っているのに、この言い回しにはそれがありません。「四川省にある成都」の意味で、文法的には「四川省の成都」なのですが、この言い回しでは「の」があると格好がつかないのです。格好がつかない理由にはふれないまま、次の文へと話を進めました。

プリントの最初の8文は、すべて「助詞」の間違いを含むものを並べました。そのうちの5番目が冒頭の文です。「助詞」の間違いの次は格助詞「の」の間違いを含む文で、6文ありました。たとえば、「自分は中国普通な家庭に生まれた普通な子供です」、「私が小学生時の物語です」。「中国」「小学生」という名詞の次の「の」が落ちているのは、中国語の影響でしょうか。「普通な家庭」「普通な子供」のはずが、どちらも「普通な」になってしまっているのは、日本語の側の問題も関係していると思います。「普通」は品詞がはっきりせず、「普通、そうは言いません」なら副詞、「普通が一番」なら名詞、「普通に考えたら、・・・」では「普通に」という副詞の一部となります。この最後の例で、「普通」を「普通に」という副詞の一部と言いましたが、副詞のように使われている「普通な」という形容動詞の連用形のようにも見えます。「普通」が形容動詞の語幹であるなら、「普通な子供」は文法的に正しい言い方です。でも、「普通な子供」という言い方は一般的ではありません。留学生はそこに感わされた可能性があります。「普通に」という言い方をよく耳にするので、名詞修飾の時は「普通な」なんだ、と考えた可能性です。

3番目の文は、

**私は今の夢は自分リンゴ園を持つことです。**

でした。

「自分のリンゴ園」の「の」が落ちています。それだけではありません。一つの文の中に二つ「は」が並んでいるのです。幸いなことに教室の学生たちは気がつきませんでした。さきほど、意味用法の異なる助詞なら一文に二つ並んでもいい、と言いました。「夏は四川省の成都はすごく暑いのですが、同じ四川省でも峨眉山麓なら過ごしやすいです。」で、「夏は」の「は」は、文の主題を示す「は」、「成都は」の「は」は対比を示す「は」で、二つの「は」は意味用法が異なる、だから、この文は不自然に響かない、と言いました。しかし、この「リンゴ園」の方は、主題と対比、ではなさそうです。「私」に関して、その「夢」に関して語っているのであって、「今の夢」と何かを対比している文ではありません。どうも、BがAの部分であるとき、同じ主題の用法の二つの「は」、「AはBはー」が成り立つらしいのです。「今の夢」は「私」に包括されるひとつの部分と考えられるわけです。

それでもやはり、「は」が二つ並んだ「私は今の夢は自分のリンゴ園を持つことです」はなんとなく落ちつきません。「私は」を取り除くと、すっきりします。二つ並んだ「は」が一つになりますし、もともと日本語は言わなくても分かる語は言わないのが原則だからです。作文に書かれた文ですから、「私の夢」について書かれていることは承知済みのことで、「私は」がない方がこなれた日本語になります。

日本語教師は、いろいろなことを考えながら、学習者に向かっています。母話話者にとって日本語は自分自身の血肉であり、自我の一部です。が、学習者にとっては、もちろん、外国語で、簡単に身につけられるものではないからです。

このクラスは、日本語を勉強するクラスで、日本語について議論、研究する演習ではありません。それに、この日はすでに学期の後半で、暑い日でもありました。一言で言うと、学生たちは疲れていました。とても、二つの「は」が並んでいい場合と、並んではいけない場合とを述べたてることはできませんでした。あのコンディションで説明を始めていたら、「あ

あ、またか。やっぱり、日本語には文法らしきものはなくて、結局、こう  
なんだからこう覚えなさい、で終わるんだ。」と、うんざりされたことで  
しょう。

イエズス会の宣教師 João Rodriguez ジョアン・ロドリゲスが著し、17世  
紀初頭に出版された『日本大文典』には、「は」についての記述がいくつ  
か見られます。以下はそのうちの一つです。

### ACCVS ART. MO.

¶ Vó, Gã, Vóba, Vá, pro Voba; nam há mais que nótár que o que  
em varios lugares se disse: foomente; Vóba, Vá, tem certa elegãcia, e Helyã  
cia que o uso ensinará, e significam quanto a L. l. coufa. V. Coreua mō  
xita. Coreua mōlanu, Coreuo mitea, Corcuoba minu.

印刷技術も未発達だし、なにしろ古い書物なのですが、

対格を示す助詞には、「を」「が」「をば」「は」があり、「をば」と  
「は」にはある種の力と品格とがある。「以下のことに関しては」とい  
う意味がある。例は、これは申した、これは申さぬ、これを見た、こ  
れをば見ぬ、などである。

といったことが読み取れます。このうちの下線部は、「elegãcia que o uso e  
nsinará」であり、これを直訳すると、「品格 (elegãcia) というのは使うこ  
と (uso) が教える (ensinará)」となります。つまり、Rodriguezは「使っ  
ているうちに覚える」と言っているのです。

また、他の箇所では、

A segunda he, Va, na qual não tem  
outra significação, mais que ser pura particula que se ajunta a todas as partes  
da oração, ainda aos de mais pronomes com varios, e elegantes sentidos; como a  
do posse se pode notar.

「は」はいろいろな品詞の語につくだけの意味しかなく、上品な意味合  
いをそえる

と、述べています。はっきりした意味がなく、使い方の説明もできないが、使えば上品だから、実際に使いながら覚えよ、ということでしょう。

いつ、どこで「は」を使うかは難しくてデリケートな問題です。「私は今の夢は自分のリンゴ園を持つことです」にしても、「私」と「今の夢」との関係は、後者が前者の部分かもしれません。でも、「BがAの部分である」時とはどんな時なのか、いつでもすっきり言えるのか、BがAの部分であるのかないのかははっきり言えない場合もあるに違いなく、その場合はどうするのか。疑問はつきません。

教師は勉強しつづけなければなりません。学問は進歩します。その進歩を無視することは許されません。ただ、すべてを身につけても、そのすべてを教室で披露する必要はありません。すべてを並べたら混乱させるだけでしょう。一番いいのは、すべてを身につけ、学生に合わせて、適切な知識を適切な形で提示することです。やさしいことではありません。

日本語学が進んだ現代でも、時には Rodriguez のように、「はっきりした意味はないけど、ぜひ使ってください。使うと上品なひびきになります。ただ、使い方は使いながら自分で身につけてください。」という教え方も大切だと思います。

